

特集 2  
2020 年度ソフィアシンポジウム  
ジェンダー・アクティヴィズムと社会変革：  
韓国#Me too 運動と台湾の同性婚法制化運動が  
日本社会へ示唆するもの

Gender Activism and Social Change: South Korea's #MeToo and Taiwan's  
Same Sex Marriage Movements—Lessons for Japanese Society

下川雅嗣、李娜榮、沈秀華、鈴木賢、古橋綾、  
出口真紀子、安谷屋貴子、三浦まり、小田川華子

はじめに

出口 真紀子  
上智大学

本特集は、2020 年度ソフィア・シンポジウムの企画として開催したイベントの記録である。日本は、韓国と台湾同様、儒教を基盤に、女性差別・性的少数者差別が根強い社会であるという共通背景を持っているにもかかわらず、韓国・台湾と比べると新しい社会運動が出現しても持続しないといった状況がある。韓国では#MeToo 運動で女性たちが立ち上がり、組織化によって女性の人権や視点をより反映した法律改正がなされ、台湾ではアジアで初の同性婚法が成立した。そうしたジェンダー平等への潮流が確実なものとなっている中、韓国、台湾と日本にはどのように異なった社会変革への要因があるのかを探り、日本社会の障壁はどこにあるのか、日本がどのような教訓を読み取ることができるかを考えるのが本企画の趣旨である。

社会運動の戦略を考える上で、欧米で培われたコミュニティ・オーガナイズングという組織化の実践と理論が、日本でも広まりつつある。本シンポジウムの前半では、韓国のフェミニズム運動と台湾の同性婚法制化運動について学び、日本における#MeToo 運動、同性婚法制化運動について専門家に解説いただき、後半では、社会の無関心層であるマジョリティ側に行動を喚起する方法、また社会運動を持続させるために有効な枠組みを紹介した。

韓国・台湾・日本と3つの拠点を比較することで、各国の違いや強みがより鮮明に浮き彫りになったように思う。韓国や台湾のムーブメントが日常の一部になっているのは、社

会運動の成功体験の積み重ねから生じたことであるのに比べ、日本では社会運動の歴史が継承されていないなど、運動が起きてもすぐに鎮静化されてしまう現象を考えるきっかけになった。登壇者はそれぞれアカデミアとアクティヴィズムの二足のわらじを履いている方ばかりで、アカデミアにおいても、社会変革の理論化と共に実践のノウハウの分析をすることの意義を再認識した。コロナ禍のため、オンライン・ウェビナー配信となり、登壇者同士の交流が直接できなかつたのが心残りではあるが、オンライン配信ならではの参加者数（194名）で登壇者・参加者にとって学びの多い時間となった。